

浅舞絞「傘に雨散り桜文様着物」に見られる絞り染めの技術

川村悦子*

宮本康男**

はじめに

秋田県立博物館では秋田の絞り染めについて実践を通して考察をすすめるためのワークショップを開設している。筆者らはこの活動の中で、浅舞絞「傘に雨散り桜文様着物」の絞りを技術復元的な見地での製作を通して考察した。なお、この製作は川村が中心となって行ったもので、宮本は技術的なプロセスの考察を行った。

1. 浅舞絞と「傘に雨散り桜文様着物」

浅舞絞は、秋田県平鹿郡浅舞地区で生産された藍の絞り染めである。かつては地元以外ではあまり知られていないローカルな絞り染めであった

が、近年は絞り染めの研究者により書籍や展示として紹介され、その知名度が高まった。「傘に雨散り桜文様着物」(図-1)は明治時代に染められたといわれている着物で、浅舞絞の代表的作品としてよく取り上げられる著名な作品である。内容的には春の雨に散る桜と傘という、流水に紅葉などと同様の伝統的叙情に裏付けられた主題であるが、数ある浅舞絞の中でもすぐれて斬新なデザインに見える作品である。藍一色であるが、地の濃紺、傘の浅黄色～花色、傘の周りとは花びらの白のコントラストが際だって美しい。また、ジグザグに配置された傘のモチーフが大柄の水玉文様のよう見え、華やかである。

図-1 傘に雨散り桜文様着物/森 寛造氏蔵

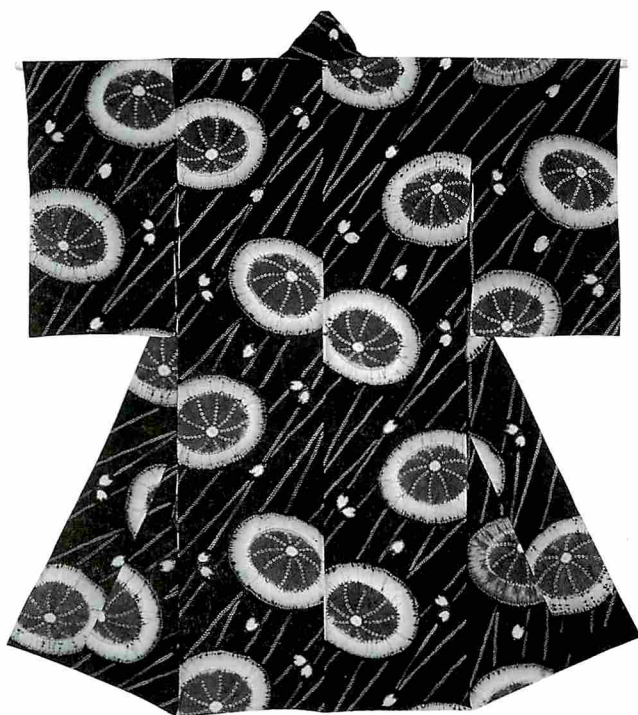
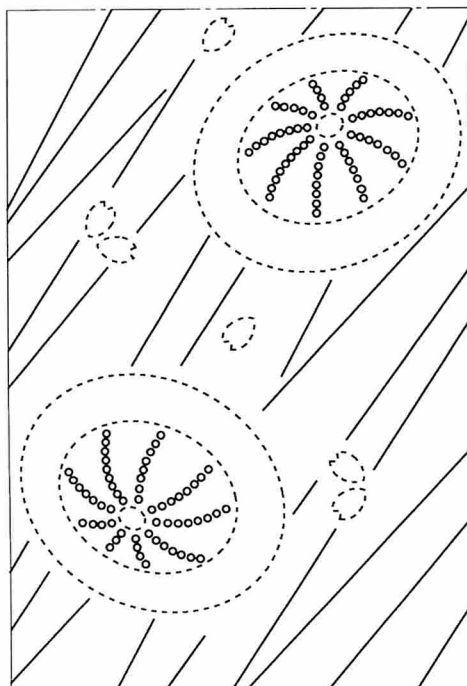


図-2 傘に雨散り桜文様のデザイン



- 折り縫い引き締め
- 平縫い引き締め
- 鹿子絞り

*山本郡山本町森岳 **秋田県立博物館

2. 「傘に雨散り桜文様着物」の

デザインと絞り技術

この絞りのデザインは図-2に示すように2尺内外の繰り返し文様で、傘と桜の花弁がジグザグに配置され中を斜めに雨が横切っている。雨は折り縫い絞り、桜の花弁と傘の中心は小帽子絞り、傘の周りは何かを巻き付けて防染して白く残したものの、傘の模様は鹿子絞り、傘の浅黄色の部分は、最初に浅黄色に染めて傘の部分のみを防染してから濃色で染めて、浅黄色を残したものとみられた。この絞りの技法については、傘の周りの白い輪の部分を除いて、一見それほど難しい問題はないように見えた。この白い部分には、外周部からの藍の滲み込みがあり、それがいかにも藍の絞り染めらしい雰囲気をつくっている。(図-3)

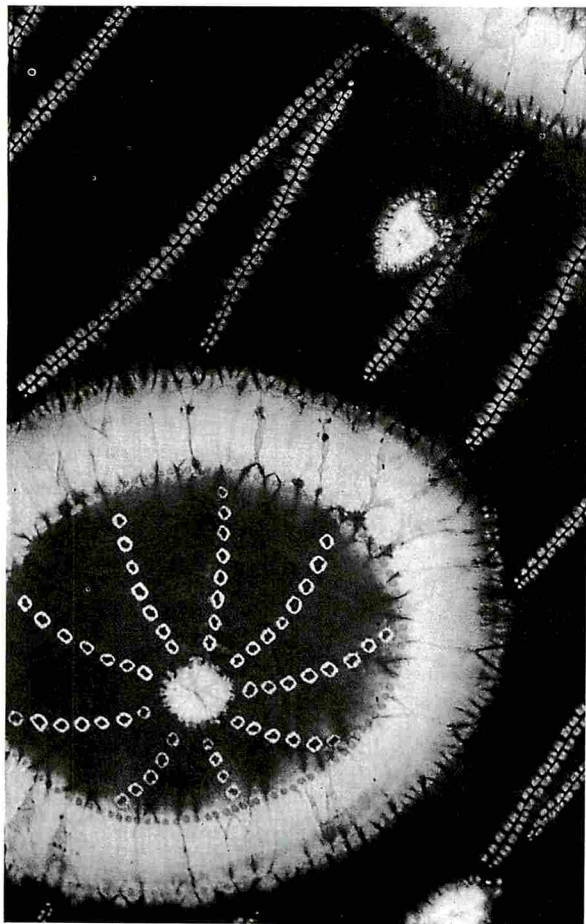


図-3 傘文様の絞りの外縁部分の滲み込み

この部分を真っ白に抜くのは造作もないが、それではこの絞りの魅力は半減してしまうのではないかと考え、この滲み込みをそのまま再現する方向で検討を進めた。この滲み込みの原因には防染の用材と、その施工の方法が大きく関わっている

と見られ、参考にした作品が染められたときの技術の一端を伺い知る手がかりを提供してくれている。問題はどのようにして程良く滲み込みを作るかである。滲み込みをよく見ると淡色の滲み込みと、濃色の滲み込みがある。淡色は表面から防染材を通して滲み込んでいるように見えるが、濃色は防染の境目から滲み込んでいるように見える。前者は浅黄色を染めたときの滲み込み、後者は濃色を染めたときの滲み込みであろう。傘の輪郭と白い輪の外側の輪郭を縫って引き締め、白い輪の部分に綿布で巻いた上を糸で巻いて防染して浅黄色を染める。さらに、傘の部分と白い輪の部分をあわせてしっかり防染して濃色を染めるという手順になると考えた。適度な滲み込みを作るためには、どの程度布を巻いて防染すればよいのか、糸はどの程度にしめればよいのかは、実験を繰り返して確かめるしか無かった。しかし、糸をできるだけ強くしめるというのは可能であるが、滲み込みを作るために一定の強さで緩く締めるというのは至難の業である。恐らく本来はきちっと締めたものが染めの過程で、糸の締め以外の条件によって滲み込み易くなる状態ができるのであろうと考える。染める前の布の水分は少ないほど染料が良く浸透する。模様をくっきり出す、地を斑にしないためには布は乾いている方が良い。しかし乾いていると布による防染は十分な効果がない。この滲み込みは、繰り返し染める過程で中干しが行われていたことを示すものかもしれない。

これらのことを踏まえて筆者らはこの製作の手順をおよそ次のように想定して作業を進めた。

→下絵を描く

→全文様に糸入れをする。

／輪郭：平縫い、雨の線折り縫い

→傘模様の中の鹿子絞りをする。

→全文様の糸締めをする。

→傘文様の外縁を布で防染する。

→桜の花弁、傘の中心を小帽子絞りにする。

→水に浸漬して強脱水してから浅黄色に染める。

→脱水・発色

→傘文様の全体を布とビニールで防染する。

→濃い藍で染める。→脱水・発色／繰り返し

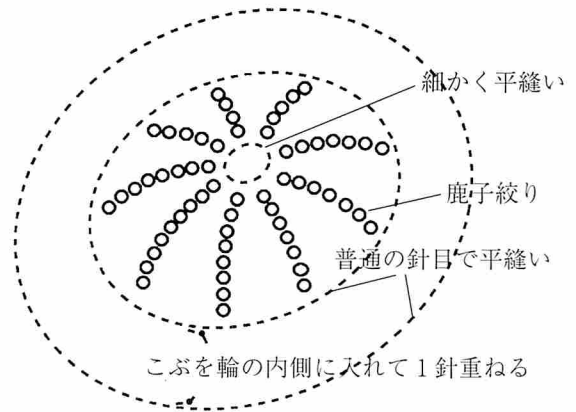
→水洗→乾燥→糸解き→仕上げ

3. 絞りの実際

1) 傘文様の糸入れと締め方

- ・傘の中心の小円の輪郭を細かく平縫いする。
- ・外縁の輪の内側と外側の線を普通の針目で平縫いする。縫いはじめと縫い終わりは結びこぶを内側に入れて一針重ねる。
- ・中心から縁への放射線を鹿子を連ねて絞る。(絞り器使用)
- ・中心の小円の平縫いを引き締めて巻き上げる。白くするためビニールフィルムで防染し帽子絞りにする。
- ・外縁の輪の内側と外側2カ所の糸を締める。このとき直径8mm程度の芯を入れて締める。この芯は染める前に抜いてしまうが、このことにより外縁部への染料のしみ込みを均一に出すことができる。(図-4)

図-4 傘文様の糸入れ



- ①イの部分を引き締めて3回糸を巻き止める。(あまりきつく締めない)
- ②口の部分もイと同じようにして糸を止める。
- ③イと口の間のひだを目打ち等を用いて細かく揃える。このとき上部をねじりながらひだを整えるとやりやすい。(図-5)
- ④イと口の間に布(さらし)を2回巻きつける。巻き方がきついと染料がしみ込みにくくなるのであまりきつくしない。また、布(さらし)は両端に余分が出ないように巻く。
- ⑤巻きつけた布を押さえるために糸を10回程度巻きつけて止める。
- ⑥芯を抜く。(確実に締めに必要なゆるみを持たせるために)
- ⑦以上の状態で全体を淡い藍色(浅葱)に染める。布の水分が多いと藍の浸透が悪いのでしみ込みが弱くなる。また、斑が出やすい。このため布は水に浸漬後しっかりと脱水機で脱水して乾き気味の状態に染める。(図-6)

図-5 ①②③

図-6 ④⑤⑥⑦

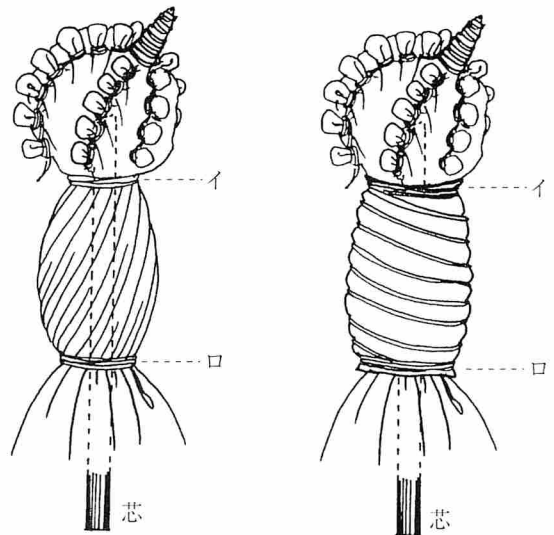


図-7 ⑧⑨



- ⑧再度芯を入れる。
- ⑨傘の部分全体を布(さらし)とビニールフィルムで巻いて防染する。布を2回巻きその上をビニールフィルムで3回巻いた。(図-7)

⑩布とビニールを巻いた部分に糸を巻いて締める。傘の中央部分は染料が入らないようにきつくしっかり糸をかけるが、外縁部の端から2.5cmほどは外へ向けて次第に緩く糸をかけて外縁に濃い藍色が滲み込むようにする。(図-8)

⑪芯を抜く

⑫濃い藍で染めを繰り返して濃色に染める。この染めではあまり斑を出したくないので、その都度乾き気味の状態で染めていく。

※ここでは傘文様の部分についてのみその染めのプロセスを示したが、他の雨や花卉の絞りと染めも同時進行している。次にそれらについて述べる。

2) 雨文様の糸入れと締め方

これは春雨文様であるので、出来るだけ細く繊細に表現したい。ここでは20番手の糸1本どりで折り縫い絞りをを行った。(図-9)

①雨の線で布を二つ折りにし、折り目から1mm下のところを細かく縫う。(図-10)

②糸を引き締めて止める。むやみに引くと糸が切れるので、針目を並べながら端から順に縫い目を送り込んできちっと締めて止める。(図-11)

③糸を引き締めて止めたら、二つ折りにした布を左右に分けて引っ張って広げる。このことにより折り縫い絞りはより細く仕上がる。

※縫い糸を無駄にしないためには、複数の針で縫いと引き締め止めをローテーションしていけばよいが、糸と手間の無駄を考えなければ、その都度縫い糸を余分を残して切り、全部縫った後端から順に引き締めて止めていくのが最もやり易い。いずれにせよ1回ごとに引き締めて止めるのは、くしゃくしゃになった布を折り縫いすることになり、困難を極める。縫い絞りの糸入れは、用布が平らな状態のうちに全て行ってしまうのがやりやすい。糸の引き締めと止めは、他の絞りとの関係で、最も仕事が進めやすいようにその順序を計画する事が大切である。(図-12)

図-8 ⑩

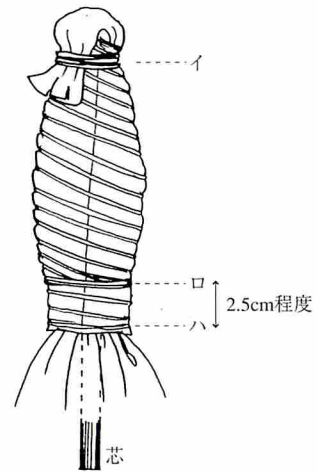


図-9 雨文様の糸入れ

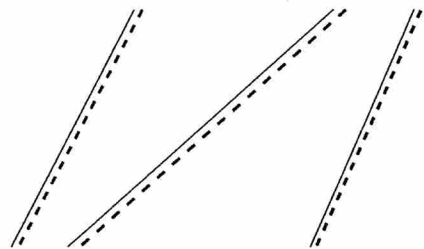


図-10 ①

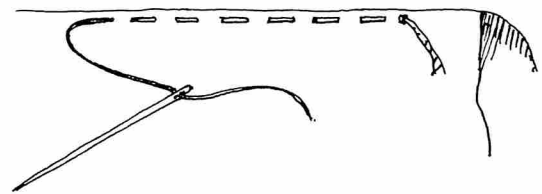


図-11 ②

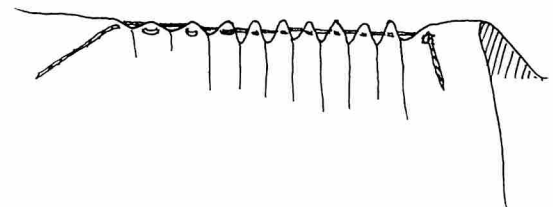
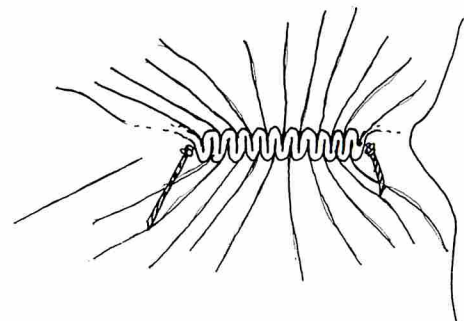


図-12 ③



3) 桜の花びら文様の糸入れと絞り方

花びらの角々がきちっと出るように表現したい。

①花びらの文様を左右対称になるように縦に二つ折りにして細かく縫う。花びらの根元のほうから縫い始めるが、折り目に沿って手前から1針ずつ縫い始める。(図-14)

②イの部分の口のところを折って合わせる。

(図-15)

③縫い糸を引き締めて、花びらの先端部分をよく引っ張って整える。(図-16)

④締めた糸の残りで縫い目の上を6~7回巻き締めて止める。(図-16)

⑤花びらを防染して帽子絞りにする。防染には布を用いたが、用心のためにビニールも併用した。まずさらしを2回巻き、その上をビニールで3回巻く。先端を折り曲げて糸でしっかりと巻いて止める。模様をくっきり出すためには、防染のための布やビニールを端に余らせない方がよい。(余分なビニール等は折り返すか、切りとる)

(図-17、18)

終わりに

傘に雨散り桜文様の絞りを、その技術を手探りでたどりながら染めてみたわけであるが、結果としては多くの疑問が残った。今回は傘文様の外縁の藍の滲み込みの効果にこだわって染めたが、元資料のこの滲み込みは果たして作為的に演出されたものであったのであろうか。よく見ると、桜の花びらの帽子絞りに滲み込みが見られる。傘文様の滲み込みも一つ一つに結構大きな差が見られ、これらの滲み込みは意識的なものではなく偶然の効果であったともみえる。しかし筆者らは、これらを意識的な演出と捉えて製作に当たった。ビニールやポリエチレンのフィルムのような材料が無かった条件下で布や紙で防染して帽子絞りをを行い、乾き気味の状態で染めると十分に防染の効果が発揮出来ないため必然的に滲み込みが出来る。また、地の染めに斑を出さないように乾き気味で染めたであろうことは想像に難くない。このような染め

図-13
花びらの文様

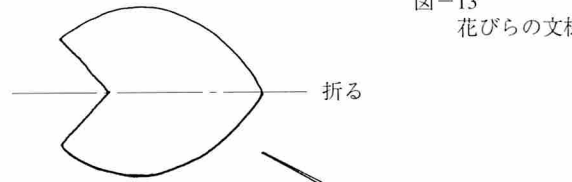


図-14 ①

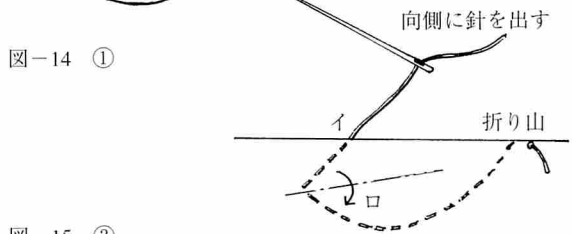


図-15 ②

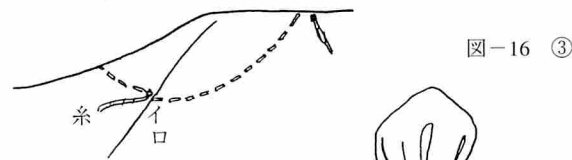


図-16 ③④



図-17 ⑤

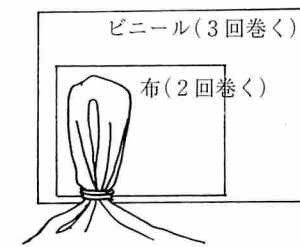
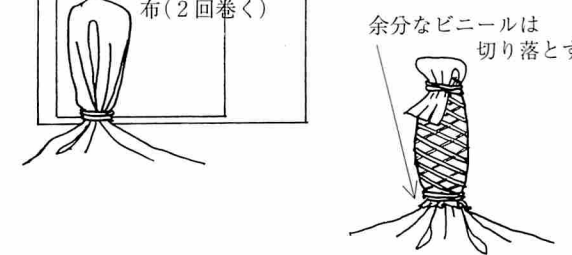


図-18 ⑤



方では、コントロールは難しいが多かれ少なかれ滲み込みが出来ることは当然製作者の念頭にあり、その効果を意識してこの意匠が作られたと考える。

今回の製作では滲み込みをコントロールしすぎたことが反省される。作為的に滲み込みを均一に作りすぎたともいえる。その結果どの傘文様にも同じ様な滲み込みができた。元資料では恐らくこのような複雑で面倒な事はしなかったと思う。手慣れた絞りが指先の感覚だけで巻き締めて染めたため、それぞれの傘の滲み込みに変化が生じたのであろう。また今回の染めでは、傘の外縁部の滲み込みが外側からだけになっている。元資料では外縁の内側から、あるいは防染材を全体的に浸透したとも見える滲み込みがある。この違いは濃色を染めるに当たって傘のモチーフ全体をビニールで防染したため、元資料の雰囲気を出すためには、防染にビニールシートを用いない方がよいと考える。

元資料の染めでは、大まかなコントロールの枠内で偶然に遊ばせることにより意匠の厚みのようなものが生み出される結果となっている。しかし、筆者らには結果を偶然にゆだねるだけの技量的なゆとりがなく、我々の技量でできる範囲で諸条件をコントロールして、元資料に感じた魅力の一端なりとも再現できればと願った。部分絞りと染めの実験を繰り返しながら、絞り糸の太さ、ゆるみの出しかた、防染の布の巻き方、染めるときの

布の水分の量、染液の濃さ等の要素がどのように染めに反映されるかを確かめ、絞りの方針、染めかたの方針を定めようやく今回の作品にたどり着いた。製作を終えての、ここまでたどり着いたという成就感にはなにもものにも代え難いものがある。しかし、たどり着いたところで、さらに遠くが見えるように、いくつもの疑問が新たに生じてきたことも確かである。これらを次へのチャレンジの原動力としていきたいと考えている。



図-19 今回染めた「傘に雨散り桜文様浴衣」